

第2回高知県社会教育委員会（平成24年8月1日～平成26年7月31日任期）会議概要

平成25年2月22日（水）13:30～16:30

高知県庁西庁舎2F 教育委員室

1. 開会

(1) 高知県社会教育委員会委員長挨拶

2. 議事（13:35～16:20）

(1) 平成25年度高知県教育委員会当初予算案の概要及び平成25年度社会教育関係団体への補助金について

【事務局より説明】

【質疑・協議】

(委員長)

この予算を見たときに、今後の社会教育・生涯学習振興行政を、どう位置付けていくかが大きな課題である。教育委員会全体の中で社会教育・生涯学習が占める位置は、学校教育と比べると弱いのは当然であるが、改めてこの社会教育委員会でどういう提案を示していくかという意味では、大変大事なところである。読書活動や放課後子どもプラン、学校支援地域本部事業については、前の社会教育委員会の中でも協議してきたことであり、それが生かされる形で予算にも反映している。今回の協議についても来年以降、予算化されることを期待したい。

補助金に関しては、金額的には前年度と変わらない。それぞれの団体の活動内容も合わせて確認してもらった上で、来年度の補助金について確定をしていきたい。

(委員)

来年度も同額の補助金をいただけるとあってありがたい。

資料にも載っているが、ふるさと教育推進事業というのは、四国八十八カ所のお遍路への事業であり、平成20年度から取り組んでいる。現在は3地区が実施しており、1つの地区が200人から300人のお遍路を対象に、児童と婦人会と一緒に札所へ行き、おせったいをする事業である。実施した地域では大変好評であり、お遍路からの礼状が学校へ届いたり、お礼ということで家を訪ねて来ることもあるようだ。今年度の事業も無事終了し、今後もぜひ続けてやりたい。

(委員)

対前年度比で100%という形で予算が確保されているが、社会教育関係団体に対しての予算請求額で重点的なものを考えたということはあるか。また、前年度から予算額は変わらないということだが、このことを要求したが通らなかったとか、この部分は削られたとかいうようなことがあれば説明していただきたい。

(事務局)

今年分は社会教育を進めていく上で、関係団体の力は不可欠であるという認識の下、昨年度は社会教育委員連絡協議会と公民館連絡協議会については増額させてもらった。増額を要求したところ、一部は認められたが、一部はそのまま財政が引き上げてしまったという状況だった。県の補助金については基本的に削減していく方向の中、昨年度と同じ水準を確保するというのは大変なことである。しかし、我々としては、今までの水準を守っていきたいという思いでやっている。ただ、個々の団体の金額をどうするかということについては、もともと運営費の補助金ということで、特にこの事業に対してお金を出すという補助金ではないので、そこは過去からの経緯と積み上げを重視しているところはある。

(委員長)

年々削られそうになっているところを、とにかくここだけは維持していこうということだと思う。他に意見がなければ社会教育関係団体への補助金については了承ということにかまわないか。

(委員)

はい。

(2)「県民の力を育み、絆を創出するための社会教育の在り方」について

①社会教育の意義について

【事務局より説明】

【質疑・協議】

(委員長)

前回は第1回目ということで、委員の皆さんに、それぞれ自由に発言してもらった。県教育委員会からもらった諮問の中身は、高知県民一人ひとりが学び続ける意欲を持ちつつ、一人ひとりの力を地域全体のものに高めていくための仕組みや社会教育の方策というものであった。

協議の論点は大きく6点あったが、本日は、その中で、「社会教育の意義について」「地域の社会教育を支える体制について」の2点に絞って協議を深めていきたいと思う。

それでは、社会教育の意義についてのプレゼンテーションをお願いしたい。

【委員によるプレゼンテーション】

(委員長)

ありがとうございました。この社会教育委員会がどのような方向を目指すべきなのかが凝縮した内容の話だった。大変わかりやすく丁寧に説明、報告してもらったが、感想や質問等があったら出してもらいたい。

学校のマネジメントと本質は同じだと思う。一人ひとりがやる気をどうやっておこし、それを地域の力に凝縮していくか。この部分は学校の仕組みだろうが地域の仕組みだろうが同じである。そういう視点で教育や学習を見直すことが必要であり、社会教育主事や教育委員会の仕事のあり方も変わってくる。新しい公共というのは、役割の変化だと思う。役割の質の変化のはずだが、量が変化しがちである。そうではなく、関係を変えるということは教育委員会自身の仕事の質を変え、協働に向けて高めていくことになる。そういう意味で、社会教育主事や職員研修の中身とあり方も大変重要になってくる。

(委員)

すごく勉強になった。先日行われた、高知県公民館研究大会の講演で聞いた話と今日の話が、僕の心にストンと落ちた。研究大会の講師の関さんは、公民館の理想の姿は、公民館の「こう」は「公」というよりは「幸せ」の「幸」、で「幸民館」なんだと言っていた。そういう姿を目指して、地域主導型の公民館への移行とそのプロセスを話してくれたのだが、形骸化してしまった組織ではなく、新しい組織をつくっての活動だった。まちづくり協議会の設立から今までの実践を聞いたが、キーワードとして、「当事者意識」「ネットワーク」「チャレンジ」「創造の心を持つことの大切さ」と言っていた。自分が教師になったとき、それから、派遣社会教育主事だったとき、首長のところまで行って熱弁を振ったことで、一緒になってやってくれたこと。校長になって学校・家庭・地域の連携に取り組み、子どもを中心に据えて、みんなで手を取り合った頃を思い出し、心を奮い立たせてもらった。派遣社会教育主事のときに学んだ仕掛けは、自分が主導ではなく、あくまでも地域住民が主体であった。自分たちがいろいろと条件整備し、みんなでつくっていくという初心に戻り、原点に帰るべきだと思った。先ほど委員長が言ったように、協働に向けた質の変化に改めていかなければいけない。では、今現在、自分がどのようなネットワークを持っているのかと考えたとき、やはり地域には素晴らしい人がまだたくさんいるので、もっと足を運んでそういう人たちとつながっていくべきだと感じた。

(委員)

素晴らしい話で勉強になった。前々から感じていたことだが、社会教育の「教育」を、ともすると我々は学校教育で学ぶイメージの延長で捉えがちになる。しかし、社会教育というものは、何でもありの世界だというくらいもっと柔軟で闊達である。それぞれの地域の特殊性や歴史も含め、自治会や婦人会が活発なところ、公民館活動が活発なところといった、その地域の特色がある。自分たちの地域に合ったやり方を考え、機関車になれそうな部分をしっかり把握し、そこが牽引して広げていくことを考えていかねばならない。人づくりという点では、かつて青年団の中心的なメンバーが、そろそろ定年が近くなったり、あるいは定年になっている時期である。高知県の行政や地域の中で活動してきた青年団員の中には、議員になったり、各地域のリーダーになったり、あるいは行政のトップに近い仕事について力を発揮していた者もいる。子どもたちも育てなければならないが、社会教育関係団体の中での若者の育ち、即戦力としてこれから地域で役立ち、末永く活躍していつてもらえるために若者をどう育てていくのか。そのために我々世代はどんな形でサポートしていったらいいのか。それこそ自分たちの立ち位置を改めて考えなくてはならない。

(委員)

私も青年というのは大事だと思っている。徳島県で青年団の研修会があり出席したのだが、現在では、団員も少なくなっており、青年団活動はなかなか難しいと感じた。徳島県では、唯一鳴門市が活発で、婚活の事業をやったりしている。若者の参加を促すために、どうすれば魅力的な活動ができるかということをや地域づくりと絡めて考えていくことが大事である。また、子どもを縁に、また、子どもを中心にしていくことで、そういうところに子育て中の若い人たちがどんどん入ってきてくれればいいと思う。

(委員)

今の話の中で、幾つか頭に残った言葉で、「アンテナを高く持つ」「戦略的なマネジメント」「行政は段階を見据えた支援でじっと待つ」というのがあったが、この待ち方というのが問題の一つになっている。

この間、ある住民の方から、まちの中心施設をつくって活性化に取り組みたいという相談を受けた。私も関連の情報は集め、その方は予算的なことを聞くために地元の教育委員会へ行ったのだが、委員会では予算を取っていないので無理ということで話が終わってしまった。それではどうしたらいいかというときに、そこにいた高知新聞社の支局長の方が、その方にそれだったらこういう方法もあるのではないかというアドバイスをくれた。ここにこういうお金があって、ここにはこういうお金があって、申請すればひょっとしたら下りるかもしれない、間に合うかもしれない。今から館長のところに行くのであれば僕もと言って、1時間半以上かけて一緒に来た。しばらく話をして、その表情を見ていて思ったことは、どのように接触をしてくれるのかが住民たちの思い・意欲の種火が消えるかどうかの境目になる。励ましてくれて一緒に考えてくれる人がいるというだけで、お金は無くても、次に自分たちは何をしていけばいいのかを考え行動し始める。そうすると、いろんな業種の人たちが、「私はこのようなことができる」とどんどん出てくる。それをどのようにつないでいくかが大事である。

例えばこの前も福祉の人が、「もう予算がないから我々の福祉の単独事業が消えます」という話で来た。そこは県立大学の社会福祉関係を学ぶ学生がたくさん手伝いに行っているんで、民間が出している補助金などがなければ調べてもらったら、200万と50万のものが2件あった。そこは、私が推薦書を書いて出しているところであり、インターネット等で調べたらいろいろな情報が出ていた。そういうふうに行行政の第一線の人たちが一声かけてあげるだけで、住民は随分元気になると思う。つくつかないかも分からない翌年度の予算に対して、1年もの空白の時間で待つというのはものすごくもったいない話である。

そこが、さっき馬場委員の話でもあったように、「アンテナを高く持つ」とか「戦略的なマネジメント」の部分とつながると思った。

(委員長)

いろいろな財源を探して、つながりを持つということは、安心を与えることであり、一緒に考えたり知恵を出したりすることは、本当に固有の専門性だと言える。そういうところは大事である。

(委員)

島根県松江市や愛媛県では、公民館の職員や一般の市民が社会教育主事の資格を取っている。そういう意味で、つなぐ能力のある人が育ってきていることは素晴らしいと思う。

(委員)

今日話を聞いて思ったことは、社会教育主事が市や公民館にいないことは影響が大きく、社会教育主事の役割である企画・運営をする人やコーディネーターがいないというのが一番の悩みである。例えば中央公民館には企画力のある元気な人を置くべきだという話があるのだが、元気な人は確かにいろいろやってくれるが、やはり社会教育の本質や意義を理解し、人をつないだり広めたりしてまちの中を構成していける核となる人が必要だと思った。

どうしても学校教育の課題は見えやすいので、それを解決していくとともに、学校教育と社会教育をつなげ、目指すべき子ども像を考えた。その結果、この社会を元気にすることができる人材に育てないといけないと考え、学校教育をその方向に進めていこうと改革的に取り組んでいるところである。ちょうど県教育委員会がキャリア教育の線を出してきたので、そこへ切り込んでいき、これからの社会をつくっていくことのできる人を育てていきたい。学校教育では“先生が教える教育”が大変強いが、子どものときから公民館やいろいろな施設、関係機関と子どもをつなぎ、自ら学ぶ力を育てることが大切である。学校生活を終え、大人になってから社会のことを一から勉強していくのでは、リーダーとして育つには遅いと思っている。

そのためには、学校教育のあり方や社会教育の切り口をどこからどうすればいいんだろうと考えているところだが、糸口は社会教育主事にあるかと思う。

(委員長)

お金がないからこそ社会教育主事が大切だという発想になればいいが、なかなかそこにつながらない。

(委員)

実は、学校とも公民館とも関係ないところで、こどもエコクラブというチームが幾つかあり、それぞれが自主的に私たちと一緒に活動している子どもたちがいる。何かを変えていきたいということもあり、来年からは公民館の活動の中に入れて、大人も一緒になってやることにしている。こどもエコクラブを公民館に置くと、たくさんものものにつながってくる。公民館は公民館、学校は学校ではなく、環境教育の一環として、まちづくりのいろいろなこととつながる。外の団体等と言うと、三嶺の山にシカがたくさんいて、そのことで活動している「三嶺の森をまもるみんなの会」という団体がある。その団体と子どもがつながる。また、公民館の子ども教室ともつながる。それからコーラスのグループとつながる。また、山へ行く活動に呼びかければたくさんの人とつながって、結果的に出来てきたものは、まちづくりそのものであったりする。

そうやって考えると、自分の仕事で全てやりあげていくことはなかなかできないが、公民館などを中心として、1つのことをすることで、もうたくさんの人がつながり絡まっていける。しっかりと結びつけることができる人やチームが、公民館の中にいてくれるとありがたい。

(委員長)

「子縁」という話を馬場先生がしていたが、今のエコクラブをきっかけにもっと広がっていく構想があるので期待したい。

(委員)

1万人以上の市町村には社会教育主事を置くように義務づけられているが、私の住んでいるところにもいない。婦人会の中でも、社会教育主事がいてほしいという話は出てくる。しかし、地域では割と公民館活動が盛んなので、人づくりは公民館が核になってやっており、公民館運営審議会は各部落長や各団体の長、それから学校関連の役員さんで運営されている。それぞれから課題が出るが、解決に向けて話し合っており、それが社会教育なのかなと思う。社会教育主事はいないが、運営も割合スムーズにいつているので地域から不満は聞かないが、安芸市全体としては主事がいてほしいという声はある。

それから、予算の話だが、婦人会でも市町村によって補助金が出ないところも幾つかある。自分たちが芸能大会を開いて稼いだという声もあるが、話し合いの中で共同募金会の方から市町村への配分金があるので、申請してはどうかという話を聞き、市の社会福祉協議会へ行ったら出してくれるということになった。やっぱり知らない部分がたくさんあるので、アンテナを張りめぐらすことは大切だと思った。

②地域の社会教育を支える体制について

【事務局より説明】

【質疑・協議】

(委員長)

今、地域の社会教育を支える体制について、大きく4つの視点から、事務局より説明してもらった。この社会教育委員会が最終的に報告書をまとめていくわけだが、改めてこの柱でいいのかということも、もう一度考える必要があると思う。社会教育の意義と行政の役割については、人づくり、人育て、あるいは戦略的なネットワーク形成に向けたコーディネート的なマネジメントの必要性があげられる。

一般的に社会教育と言ったときに社会教育委員や社会教育主事をはじめとする専門職の現状はどうか。また、地域の公民館と称する施設の運営や研修はどうか。このような柱でそれぞれ課題と取組の方向性を示してもらっている。まずは社会教育委員について、委員の皆さんから意見を出してもらいたい。

(委員)

昨日の高知県社会教育委員連絡協議会の研修会へ参加させてもらった。グループ協議で参加者の話を聞くと、社会教育委員になって、まだ日が浅い方が随分いたが、その市町村の行政担当が社会教育委員について認識不足で、委員としての役割を言われていないし、誰が委員になっているのか名前も分からないという意見があった。会の内容についても、年度当初に予算案や事業報告だけで、年に多くて2回ぐらいしかやっていない。市町村も社会教育委員を任命・委嘱するに当たっては、それぐらいのことはきちんとしてほしいし、初歩だと思う。そういう実態があると聞いて本当に驚いた。

(委員長)

現状はそういうところもある。そういう意味では、今の現状をどのように考え、ここで何を提案していけばよいかということになる。委員会の回数を増やせばよいというわけではないが、どういう論議や協議をする場なのか、あるいはどういう協議をする必要があるのかという提案は、社会教育や生涯学習の本質から、こちらが提案することはできる。

私の経験では、地域や暮らしの課題が語られる運営というものは本当にいいものである。住民や子どもの顔が見える社会教育委員の会議の運営をしないとイケない。手続論的に会議が3回ほどで終わる状況を変えるために、社会教育委員会が提案してもいいし、委員自身はそれぞれ専門性を持っているので、その視点から勉強会を開いていくという方法もある。

(委員)

県や高知市は、生涯学習課という大きな看板があるが、小さい町村になれば、教育委員会の中に担当者が1人か2人いる程度である。そうすると、社会教育委員の任命や委嘱のために、誰がその資質を見抜くのか。任命者である長の「こういう社会教育を我が自治体ではやりたい」という思いで人選されていくのだろうと思う。しっかり人選してもらえるように、県側が市町村に指導・養成をしていく。そして、何より社会教育が好きな人に委員になってもらいたい。人選を変えるだけで随分社会教育委員会の熱は上がっていくのではないかと。

(委員長)

人選については形式的な平等主義で、一応それぞれの団体全部に声をかけないと悪いということで、団体のリーダーが出てくる形になりがちだが、やりたい人をきちんと見つけて、その人をお願いする方がよほど現実的に

動いていく。

社会教育委員のことに止まらず、社会教育主事や資格を持った人を配置するという点についてはどうか。

(委員)

自分の与えられた仕事に対して勉強しようとか、社会教育主事研修を受けることは必要である。けれど、ある時間拘束される現実があり、市町村にはそんな余裕がないために、社会教育主事講習の受講者が非常に少ないのではないかと。県ではそれだけの専門性を持ってはいけなくてはいけないということで、県職員の受講率が高いのだと思う。でも、主事講習の受講者を一気に増やしていくというのはなかなか難しいと思う。受講率の向上を目指す一方で、主事講習は受けなくても、学習会やテキストの提示により、担当職員の資質を上げる方策を考えていかないと、社会教育主事講習や県主催の主事研修だけでは無理がある。それ一本だけに絞るのではなく、幾つもの道で資質を上げていくことを考えなければならない。

(委員長)

例えば、長野県や佐賀県では社会教育の職場に来たときに、これを読めばいいという資料を県が作成している。主事講習に出ないと分からないではなく、職場に来てそれを見て分かるようなツールも必要である。意外とそういったパンフレットなどの資料は少ない。多様な学習機会を考えて取り組むことが必要である。

(委員)

素晴らしい事例の後ろには、一般の人が社会教育主事講習を受けている実態もある。住民にも参加を促すことが地域を元気にしていくことになる。

(委員長)

受講資格の緩和なども考えなければいけないと思う。

(委員)

遠くまで行くのは大変だが、意欲ある人はぜひ受講してほしい。社会教育主事講習の履修単位は積み上げも可能であり、1年に全部受けなくてもかまわない。

(委員長)

行政職員に限らず、一般の人でも専門性を広く持ってもらおう仕組みが必要である。

(委員)

私が現場にいたときに県民の方々からよく聞いたのだが、県や市町村主催の研修には毎回出ているが、その後に、どこでどのように活躍しているのかわからず、活動する場や機会を与えられない。この部分をどのようにしていくかも大事である。また、非常勤が何人いるというのも大事なデータであるが、正規の職員が多くいるからそれだけでいいという問題でもない。例えば、ボランティア登録が多い公民館には何か特色があると思う。公民館はどのように利用され、年間の利用者数はどれだけのものか。利用登録団体があるのであれば、それはどんな団体なのか。各地区のコミュニティとどのようにかかわっているのか。市町村が主催する講座や教室はどれだけのものか。自治会や地区コミュニティの会議はどれだけのものか。各種イベントの会場として、年間どれだけの使用しているのか。テーマごとに言えば、防災、環境美化、青少年健全、防犯、祭典、文化祭や教養講座などいろいろあると思う。それが市町村ごとにどのようにクロスされて運営されているかをベースにして、この地区はこういうことに力を入れているから、こういう部分の人なりを軸にして広げようよという考え方が大切だ。オールラウンドで全部やれる公民館というのはなかなかないと思う。

映画『じんじん』にもなっているが、「絵本の里づくり」といって絵本の読み聞かせだけをやっている北海道剣淵町というところがある。それは住民が本読みの名手になって、そこを売りにして地域がまとまっている。人のまとめ方というのは、オールラウンドのジェネラリストにならなくても、ある1点集中型からスタートしてでもかまわないと思う。そこから変化があるかもしれない。

(委員長)

公民館事業、あるいは公民館活動をしっかり把握するという点だと思う。事業というのはあれもこれもやる

必要はなく、1点突破でしっかりやっているところに光を当てたり、整理したりして市町村に示していく方が、より公民館を活性化する手立てになるのではないかと。そういうことにもう少し踏み込んで情報を集める必要がある。

(委員)

研修で言うと、例えば、地域づくり支援員。地域づくりとか読み聞かせも含めた研修会はよくやってくれる。しかし、研修を受けても、次に何をしたいのかという二の矢がなかなか来ない。また、観光ボランティアでも、ボランティアガイドの研修は受けがどこからも声がかからない。自分から言っていかなければならないのかという話になる。

私の施設には、ボランティアが72人登録してくれており、それを6班に分けている。班を決めた後、世話役を決め、誰がこれを分担するかということ決めていく。次の声かけと、研修後の人たちに具体的にどう動いてもらうかというシナリオを持っておくことが必要である。

(委員)

市町村単位で社会教育主事がないところはあるけど、社会教育委員のいないところはない。社会教育委員が中心となって、社会教育関係団体の人たちを一堂に集めることにより、社会教育委員も自分たちが背負っている役割を自覚する。そしてそういう場を通して、うちのまちには社会教育関係団体にはどんな人がいるのかということがお互いにかかる。これからのまちづくりは、一番生活に密着した集落へ力を持っていかないと地域は変わっていかない。そのためには、その地域を変えていく人材を社会教育委員が見つないでいくという自覚を持ち、それを行政として担当者がサポートすることができれば、市町村段階の社会教育がもっとダイナミックに動いていくような気がする。

(委員)

今の意見に大賛成である。まだ合併前で市町村がたくさんあった頃、現場に出たときに読み聞かせを、20人規模でやっているところもあれば、小さい地域では1人か2人で細々とやっていたので、それを広域にネットしたらどうかと思った。そのことを行政の担当者に電話して聞いても、どこで誰がやっているのかなかなか返事が返ってこない。ところが実際にやっている人に聞くと、何々町は誰々がやりますと一夜のうちに全部を返ってくる。そうやってリストを作ることで、広域で動くことが可能となり、いろいろな施設へ行くことができる。人材バンクみたいなリストがどこかにあると、いざというときにすぐ役立つ。そのような情報は市町村の役場の詳しい人は持っているかもしれないが、むしろ実際にやっている人に聞くほうが講師の派遣や、手伝ってくれる方の情報は速いかもしれない。

(委員長)

大洲で行われた地域教育実践交流集会のようなものをつくるにはものすごいエネルギーが要るが、大きなレベルでなく小さな単位で行う交流大会で、地域にいる様々な人が集まって交流すれば、そこからまたネットワークや人材が広がっていく。そういう小さい交流会のようなものをもっと増やしていくことができればいいと思う。それによって結果的にネットワークができていく。単なるリストではなく、顔の見える人材リストができる。各分野を超えた交流集会は、社会教育だからこそできる。小さい単位でもかまわないし、市町村単位あるいはもう少し広い広域で、交流会を1年に1回ぐらいやれるといい。1回やるだけで随分変わると思う。

(委員)

私もあるとき、広域イベントで高知を拠点にしている老舗の活動団体をゲストで呼んだ。するとそのイベントへ遠くからもバスで来た。やる気があって意欲的な人はたくさんいるので、巻き込んでいく仕掛けをつくるのがコーディネーターとしての役割である。

(委員)

社会教育委員の人選は、職域を外して自由に選ぶことができるが、なかなか適任を選んでいないところがある。入ってもらわないといけない職もあるが、今は、公募制のところも出てきている。

(委員)

一気に変えるというのは難しいと思う。だけど、経験者や実際に活動している人たち、また、地域の中で力を持つて人は、その力に依拠していけば思いがけない力を発揮してくれる。だから、若い人や小さい範囲で活動している人たちは、いろんな人脈に上手に甘えて、「こんな人を紹介してほしい」とか「こういう知り合いはいないか」などと言うと、「よう頼ってくれた」と言っているいろいろと自分の知っている人材を出してくれる。本当によく知っている。思いがけない知り合いを抱えている人が結構いる。地域の見えざる財産である。

(委員)

こんなところでこんなことしている人がいると教えてくれる。全然こちらのリストにない人が出てくる。また、実践していくノウハウはすごいから、思いもつかないようなことをやる。

(委員長)

教育資源という言葉があるが、まさにその通りである。

(委員)

なるべく風呂敷を広げてオープンにして、自分たちの持っている財産を確認し合いながら有効利用すれば、予算が少なくても自分たちの知恵と力でアイデアのある取組はできる。それが、社会教育の面白みであり醍醐味もある。

(委員)

行政職員が社会教育委員を考えるときに、どうしても1回くらいで考える。だから、予算がないという話になってしまう。以前私が調査を行ったときの話だが、北海道千歳市は年間10何回やっていると聞いていた。そんなに市が裕福だとは思えないが、なぜそんなにできるのか聞くと、委員になっている方の意識がすごく高くて、自分たちで行政評価の手法を研究しようと毎月集まっている。要するに我々社会教育委員は、ボランティアだから委員手当など関係ないと言って自主的に集まっている。そういう人を選べば、まちもすごく変わっていく。

(委員長)

むしろ、こんなにやってもらっては困ると行政が思うぐらいの関係が大事。

(委員)

社会教育委員は、行政に対して「もう少ししっかりやってくれよ」と言って背中を押す役割を背負っている。地域住民の代表として行政と向かい合って施策をつくる、住民の力を発揮する方法を探る役割なので、いろいろな知恵を使えば、定例の社会教育委員会は年2、3回でもかまわない。臨時で会を開くことができるので、臨時の委員会は自由参加にする。だんだんとその自由参加の数を増やしていき、「こんなことをやりました」という報告を出せば、「そんな面白いことをやっているのであれば、次は行こうか」とかいう話になってくる。いろいろな取組の仕方を通して、社会教育委員の熱を上げていく。そして、その熱を地域に波及させていくような方策を考えていくことが大事である。

(委員)

公民館の運営審議会に、地域のNPO団体利用者などが入る割合がだんだんと高くなってきているが、利用者がきちんとその施設の運営にかかわっていく姿勢は、これから大事なことだと思う。社会教育委員は、しっかりとその地域の社会教育を考える人になってもらいたい。

(委員長)

今日は、4つの視点で課題と取組方向を委員会から出してもらったが、協議の中身を深く進めることができた。これからの方向については、社会教育の意義で提示したことと収斂しながら考えていく。

(委員)

社会教育主事講習も考えていけないといけないが、講習に出られない人の資質をどう高めていくのかを、県として体系的に考えていく必要がある。

(委員長)

まさに、その通りである。では、本日の協議について終了する。

3. 閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課課長挨拶